

Ⅱ．研修別報告

6．養護教諭のスキルアップと 養護教諭像の醸成を目指した学びの会

養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

キーワード： 養護教諭 スキルアップ 現職研修

I. はじめに

養護教諭には、学校という場でその職務を遂行するための様々な能力が必要とされる。養護教諭は、各学校に一名の配置である場合が多く、その職務内容は、校種、勤務学校の規模などにより大きく異なる。さらに、法制度改正、時代のニーズにより職務内容を変えることや、国・県の方針を意識することも求められる。職務を遂行する過程で生じる課題について、小中学校では、近隣校との交流の機会（地域の養護教諭部会など）があるが、高等学校では、こうした機会も少ない。さらに高等学校では、生徒の生活地域は広域となり、扱う健康問題等も複雑になるため、より一層、相談者を得にくく、悩みや葛藤の共有も難しい状況となっている。このように、養護教諭が職務遂行において抱える悩みや葛藤は多様であり、さらにそれらを他者と分かち合うことや、十分な経験を持つ養護教諭への相談ができていく現状がある。

岐阜県において養護教諭に対する現職研修としては、新規採用研修・6年目研修・12年目研修等が行われているが、一般教諭の研修に比べ研修回数等が少ないことや、指導養護教諭が身近にいない状況での研修になっている。職務遂行において抱える悩みや葛藤、課題の解決が研修の場だけでは解消できていないのではないかと考えられる。本学においても、卒業生交流会が開催されているが、養護教諭の卒後支援には、養護教諭の職務事情、養護教諭の悩みや葛藤に特化したディスカッションや、ベテラン養護教諭からの助言、そしてネットワークづくりまで視野に入れた支援が必要であり、現行の卒業生交流会では各々の課題を解決するまでには至っていない現状がある。

また、新規採用後、養護教諭としての経験を一通り終えた卒後4～6年目に当たる時期には、転任による職務変化を経験する時期でもあり、自身の養護教諭像を模索し始める時期でもある。この時期、各養護教諭にはスキルアップや、目指す養護教諭像の再検討が求められる。しかし、養護教諭自身に向上意欲があっても、前述した養護教諭の職務の特性から、スキルアップにつながる方法が見出せず、自分が描く養護教諭像を定めにくい現状がある。その結果、向上意欲の低下や、養護教諭の魅力さえも見失う場合も生じている。

これらのことから、卒後1～6年目となる養護教諭を対象に、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とし、現職教育の充実にもつなげたい。

II. 事業担当者

本事業は、以下の教員で実施する。

育成期看護学領域：長瀬 仁美 山本 真実 機能看護学領域：松本 訓枝

III. 事業（研修会）の企画

1. 養護教諭学びの会の開催

1) 目的

卒後1～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とする。それにより、養護教諭としてのスキルアップに向けた意欲を養う。また将来的には、自主的な勉強会等へと発展することを目指す。

2) 対象

経験年数1～6年目の養護教諭を対象とするが、希望があれば、卒業校・経験年数を問わず参加可能とした。本学の卒業生を含む、経験年数1～6年目程度となる養護教諭を対象に実施案内を送付し、参加者を募った。今年度も県内すべての地域に案内を送付した。

3) 実施方法

本学会会場として、学びの会を2回開催する。参加の有無について返信を依頼し、その際、職務に関する感想（悩み・葛藤を含む）、今後学びたいことを募集した。研修時間は1回あたり3時間程度とした。実施内容は以下に示した。

- ① 自己紹介
- ② ベテラン養護教諭の講話
 - ・ 卒後1～6年目養護教諭の悩みや葛藤に関わる具体的な実践内容。
 - ・ ベテラン養護教諭が実践の中で培った養護教諭としての理念。
- ③ 悩みや葛藤、解決の方法等についてディスカッション。

グループ編成は2通りとする。

- ・経験年数ごとに分かれた養護教諭とベテラン養護教諭、大学教員によって構成する。
- ・経験年数混在（ベテラン養護教諭含む）養護教諭、大学教員によって構成する。

- ④ 終了後アンケートを実施し、本会参加の感想、本会参加による仕事への意欲の変化、本会への希望などについて意見を集める。
- ⑤ 教員とベテラン養護教諭で学びの会の成果や今後の方針について意見交流する。

IV. 研修会の実施

1. 実施内容

1) 平成 29 年度

第2回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成 30 年 3 月 3 日（土）13:30～16:00

プログラム：講話とディスカッション

「養護教諭として思うこと・考えること」

岐阜県立関高等学校養護教諭

坂口 美保子

岐阜県立岐阜北高等学校養護教諭

川田 由美子

2) 平成 30 年度

①第1回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成 30 年 10 月 2 日（土）13:00～16:00

プログラム：講話 「健康教育の進め方 ～これまでの実践から～」

岐阜市立茜部小学校養護教諭

川島あけみ

グループディスカッション（経験年数別）

②第2回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成 31 年 3 月 2 日（土）13:00～16:00

プログラム：講話

「組織を活かした健康教育の在り方」

羽島市立中島小学校養護教諭

首藤めぐみ

「特別支援学校における養護教諭の役割から」

岐阜県立大垣特別支援学校養護教諭

板津まりな

グループディスカッション（経験年数混在型）

2. 参加者の状況

養護教諭学びの会参加者数（平成 28～30 年度）を表 1 に、平成 30 年度第 1 回養護教諭学びの会参加者数の校種・経験年数別参加者の人数及び本学卒業者の参加者数を表 2 に示す。

表 1 養護教諭学びの会参加者数（平成 28～30 年度）

人

		合計	1～3 年	4～6 年	7～9 年	10 年以上
平成 28 年度	第 1 回	16	7	5	1	3
	第 2 回	25	16	5	2	2
平成 29 年度	第 1 回	16	5	2	2	7
	第 2 回	17	6	6	3	2
平成 30 年度	第 1 回	22	8	11	3	0

表 2 平成 30 年度第 1 回養護教諭学びの会参加者数

人

	合計	1～3 年	4～6 年	7～9 年
小学校	14	6	6	2
中学校	8	2	5	1
高等学校	0	0	0	0
合計	22(8)	8(4)	11(4)	3

*合計（ ）内の数字は、本学卒業者の参加人数

3. 参加者の意見

1) 平成 29 年度第 2 回の学びの会の意見・感想

17 名の参加者があり、16 名からアンケートの回答があった。「日々の積み重ねや振り返りの大切さを感じた」、「改めて養護教諭としての役割について考える機会となった」、「他の職員を巻き込んでの

保健室経営を推進する必要性を感じた」「学び続ける姿勢が大切だと強く思った」「直ぐに答えを出そうとせず自問自答していきたい」といった意見があった。

2) 養護教諭学びの会参加者の学びの明確化

平成 30 年度第 1 回養護教諭学びの会における、職務に対する思いや悩み、今後学びたいことについて自由記述を表 3 に示す。参加者 22 名のうち、17 名より回答を得た。(回答率 77.3%) 開催前の参加者の職務に対する思いや悩み、今後学びたい内容は、「養護教諭としてのスキルアップ」「子供の主体性を伸ばす健康教育」「保健室対応」「救急処置事例」「性に関する教育」「教職員との協働」であった。

表 3 職務に対する思いや悩み・今後学びたいこと

カテゴリ	要約
養護教諭としてのスキルアップ	基礎形成期と言われる時期ではあるが、同じことばかり繰り返すのではなく、仕事の改善もしていかなければならないと感じる。基礎を大切に、スキルアップをしていくためには、どこから始めたらよいか悩んでいる。
子供の主体性を伸ばす健康教育	養護教諭という仕事の最低限のラインは何とかできていけるのかなと思えるようになってきた。一方、子供の力を伸ばす、よりよい健康状態へ導くような指導については、まだまだ力不足であると日々感じる。自身の取り組みに活かすヒントを学びたい。 しっかりとした知識や根拠をもって、学校の実態にあった健康教育をしていくこと。
保健室対応	登校をしぶる子が多くなった。養護教諭としてどのように関わっていけるか模索している。自分の考えを深める場になりたい。
	様々なことを経験した事例が少なく、次の学校でスムーズに適切に対応できるか。
	子供からの情報を引き出すために、どのようなことを考えて、どのような言葉かけをするとよいか
	症状に対する見極めや判断のスキルを高めること
	保健室に来室すると固まってしまう児童、こちらの指示を聞いてくれない児童への関わり方のコツを知りたい。
	保健室で役立つカウンセリング技術について 保健室登校の児童への関わり方、子供に寄り添うとはどういうことか
救急処置事例	けがや疾病による来室が少ない。実際に体験された事例を聞き、対応を学びたい。 小規模校で救急処置事例の経験が少ない。救急対応した事例について聞きたい。
性に関する教育	初めて中学校勤務になり、性に関する指導でどのように対応したらよいか。
教職員との協働	職員と上手く連携をとること。 学校内の教職員の連携の在り方やチームとして子供を支援していくために、養護教諭としてできること、日々行っていることについて聞きたい。

3) アンケート調査結果

研修会の終了時に評価のためにアンケート調査を行った。質問項目は「研修会での学び」「研修会に対する意見」とし、自由記述で回答を求めた。昨年度から継続して参加している養護教諭が多いことから、アンケート項目に「スキルアップを図るために、今後どのようなことをしたいか」「若手養護教諭が育っていくために取組むと良いこと・課題だと思うこと」を追加した。1 回目の学びの会では 22 名に配布し 21 名から回答が得られた。回収率は 95.5%であった。

4) 学びの内容

学びの内容は、【養護教諭の職務の振り返り】【養護教諭としてのスキルアップの必要性】【養護教諭像の醸成】【健康教育の目標の明確化】【養護教諭の職務の発展のさせ方】【悩みや葛藤】に分類された。詳細を表 4 に示す。

5) スキルアップを図るために、今後取り組みたいこと

- ・自分の執務を振り返って、子供のために、工夫をしていきたい。(3)
- ・今回のような研修をできる限り受けて、知識を積み重ねそれを実践していきたい。(2)
- ・子供たちの健康的な生活のため基本的な生活習慣の習得に力を入れたい。
- ・子供への接し方を今より丁寧にし、子供を愛するという気持ちを持ち続けたい。(2)
- ・自分から動くことを積極的にする。困ったことや悩んだときには、校内の教職員や地域や先輩の養護教諭に尋ねるなど自分がまず動くことを心がける。(4)
- ・課題に対して様々な手段を探し、失敗を恐れずやってみるという意識を持つことを大切にする。(2)
- ・職員との連携し、遠慮せず健康についての情報をもっと発信したり職員研修を行ったりする。(4)
- ・まずは声に出すことを意識し、行動に移していく。(2)
- ・子供たちの行動変容を促すような保健指導、性に関する指導の仕方についても勉強したい。(1)

表4 第1回「養護教諭学びの会」学びの内容

養護教諭の職務の振り返り	普段、何気なく行っていることでも、きちんと意味が分かっていたり、何となく行っていたりしたことに気付きました。
	自分では、やれていないことをたくさん見つけることができました。
	初心に帰って、もう1度自分の身の回りから整えます。
	日常生活でいっぱいになりがちで目をそらしていた面があったことに気付かされました。
養護教諭としてのスキルアップの必要性	現場での細かい対応なども教えていただき、安心できることがたくさんありました。やはり、多くの意見や研修内容を知ることが必要だと改めて思いました。
	何をやるにも、目的や目指す姿があること、子供たちの健康づくりは、考えなしではいけないことなど、はっとさせられました。
	養護教諭が持っている知識を発信して、学校全体に広める、1人で抱えこまずに連携を通じて、進めていくことの大切さを改めて学びました。
養護教諭像の醸成	養護教諭に採用されることがゴールではなくスタートだと改めて思いました。
	養護教諭ってこんなこともできる、もっと自分ができることがあると前向きな気持ちになりました。
	養護教諭という立場は、学校に1人で難しい立場ではありますが、それでも発信して、くじけず、強くなるのが自分の責任だと思いました。
健康教育の目的の明確化	時間はかかるかもしれませんが、いつか先輩方のような養護教諭になりたいと思いました。
	子供の対応で、担任や本人の思いをくみ取りながらどうしていこうか悩むことが多々ありますが、目的を見失わずに職務にあたっていこうと学びました。
	自分が何を意図してどういう方法でどんな子供たちになってほしいかを他職員と共有することで、協力を得て子供たちや全校の健康へ働きかけることができるとわかった。
	目指す姿や自分がこれだけは！と思っていることを明確にすることが大切なのだと学びました。
養護教諭の職務の発展のさせ方	ゴールを設定することで、より良い手立てが生まれるのだと感じました。
	「こんなにも子供たちのためにできることがあるのだ。」と、驚いたとともに、もっともっと子供たちのために働きかけていかなければならないと思いました。
	子供が自分で納得して、自分の健康を守るための行動が取れるように、保健指導や掲示などを工夫していきたい。
	小学校の保健委員会でも自分たちで実態から計画を立てて実行していくところが印象に残った。中学校でも一つ一つの活動に価値づけをしていきたいと思った。
	委員会活動では、子供たちが主体となかなかできていないので、子供たちの声に耳を傾けながら今後すすめていきたい。
	7月の豪雨で被害にあったり、避難をしたりした子供たちがいる中で、養護教諭として何ができるかをしっかりと考えていなかったと思いました。
悩みや葛藤	職員研修や保健委員会、危機管理体制など、多くの実践例を紹介していただいて、これからに参考になることばかりでした。
	経験が少ないので、何をどこまでやるか分からないまま、ここまでできたが、こういう方法があるのかと分かったことがとても大きかった。
	こんなことをしたいと思っても、自信がなくて言えなかったり、意見が通らなかったりしたことが今まであった。落ち込むのではなく、子供のために、子供を大切にしたいという気持ちをエネルギーにかえてまた明日からがんばろうと思う
	養護教諭は一人職で、自分のしていることが正しいのか、正しくないのかがわからない。
	日々の仕事の中での悩みや分からないことを気軽に言えることだと思う。学校の中にいると、なかなか言い出しにくいこともある。
	いろいろな学校の養護教諭の交流の場があると新しい発見や、自分がやっていることの自信を持つ機会になると思った。
	今回のような交流の機会があまりないこと

4. 研修テーマ・研修内容の評価

第1回学びの会では、21名から回答があった。研修会のテーマ・内容ともに「良かった」は21名(100%)であった。次回研修会への参加希望は「是非参加したい」は21名(100%)であった。「スキルアップにつながる研修会を継続してほしい」「ディスカッションの中で考えることや気付くこと、直接教えてもらう機会になる」といった意見があった。今回は経験年数の5年未満が参加者の75%を占めていたことから、経験年数別に分かれてグループディスカッションを行った。ファシリテーターとしてベテラン養護教諭を配置したことで、自身の課題に目を向けた話し合いとなるよう方向づけることができ有効だった。参加した養護教諭は、自校で抱える健康課題をもった子どもたちへの対応や健康教育を実践していくために学校組織内で養護教諭としてどう働きかけていくか等、個々それぞれに悩みをもって研修会に参加している。参加者の全てのニーズに合わせた研修会にすることは難しいが、スキルアップしていきたいと感じて集まった若手養護教諭の存在に、ベテラン養護教諭からも期待が集まった。次回への参加意欲が高まった研修会であった。経験年数が混在したディスカッションを行うことは、自身の成長をより描きやすくなり、メンターの育成にもつながると考えられるので、次回は取り入れていくとよい。

V. 参加看護職の意見と成果

参加者のニーズは、自校の健康教育の推進や保健室対応等、各々が抱える様々な内容であり、事例への早期の対処方法、具体的な職務の進め方や手法、具体物を知りたいというものでもあった。経験年数が浅い養護教諭にとっては、他校の実践、しかもベテランの養護教諭の実践は、そのまま取り入れて実践したい内容であろう。しかし、今後養護教諭として、校種や規模のことなる学校で継続して勤務し、学校保健活動の中核的なリーダーとして成長するには、経験の浅い若手のうちに、養護教諭としての考え方や視点を学ぶ姿勢こそが重要であると考えられた。グループのファシリテーターがベテラン養護教諭であったことから、ディスカッションでの視点を明確にもって深めることができた。参加養護教諭が、自らの実践を省察した上で、ベテラン養護教諭の助言を受けたことで、自身の今後の目標を見つける機会となった。ベテラン養護教諭が、ある程度の実践を積んでいる中で感じる課題と、経験年数の浅い養護教諭が感じる課題には、若干の差があることは予想されたが、視点を示すことにより学び方を変化させていることが講話後のディスカッションから確認された。事実的な知識や対応スキルを身に付けることが大切なのではなく、自己の課題をどのように捉えるか論理的な学びへと広がった。

VI. 教員の自己点検評価

1. 実践の場にも与えた影響

養護教諭学びの会で実践を振り返る視点を学ぶことができたことで、その後、校内の実践を意識的に見るようになるようになったという意見があった。前任者の実践をただ継承するのではなく、実践の問い直しにつながったということだった。自身の職務内容の充実に向けて主体的に考え改善している意欲につながったと推察される。また、今回の会でファシリテーターや講師を務めたベテラン養護教諭から、若手養護教諭の積極的な姿から、スキルアップを図りたいと願う若手養護教諭の存在を頼もしく感じたという感想があった。地域や市町の養護教諭部会等では、若い養護教諭は、遠慮してなかなか発言することができない状況であったが、今回の経験を生かし、今後は、「自分から動くことを積極的にする」、「困ったことや悩んだときには、校内の教職員や地域や先輩の養護教諭に尋ねる」といった若手養護教諭の意識に変化があったことも会の開催に意義があったと評価できる。さらに、経験年数7~9年の養護教諭がミドルリーダーに成長するためには、自分よりも経験の浅い若手を育てる立場になったことを実感し、自身の経験や考え方が若手の学びにつながるような交流が求められる。ディスカッションを通してミドルリーダーとしての経験を得る機会の提供は、養護教諭像の醸成を促すことにつながったのではないかとと思われる。

2. 本学の教育・研究活動にも与えた影響

養護教諭の学びを知ることは、基礎を形成する上での大学教育と実践をつないでいくための学修の在り方を考えるうえでの貴重な機会となった。また、卒業後の支援につながり、広く現場の養護教諭との関係を作るうえでも有意義であった。

VII. 今後の課題、発展の方向

養護教諭に特化した本事業を実施することの意味は大きい。参加者自身が、実践の省察と同職種からの評価を得ることによって生まれる達成感や満足感は、スキルアップや養護教諭像を醸成するために必要なことだと感じる。今後は、経験年数に準じた学びとメンターとなるミドルリーダーの育成につながるよう、参加養護教諭からの実践報告等も取り入れていく。